

所蔵品ガイド

対話をしながらギャラリーを巡るガイド

ガイドスタッフの主な仕事は、毎日14時から1時間、所蔵品ギャラリーで行う所蔵品ガイドです。2003年5月23日にスタートして以来、約2300回以上実施され、約3万人が参加しました(2011年末時点)。

所蔵品ガイドは、いわゆる一般的な展示解説ではなく、ガイドスタッフが参加者の発言や感想を引き出しながら展開する「対話型」のギャラリートークであり、多様な解釈や対話の深まりを楽しむことができます。参加者が主役、ガイドスタッフはいわば進行役です。日替わりで担当者や内容が変わるため、日々異なるガイドを楽しめる所蔵品ガイド。今ではリピーターも増え、当館の定番プログラムとなりました。

ある日の所蔵品ガイド (2011年11月8日) 準備から片付けまで

12:30 当番のガイドスタッフが美術館に到着

13:30 看板出し

エントランスにテーマと作品を書いた看板を出します。



館内では2度のアナウンスが流れる

13:55 開始5分前に待機

今日のテーマは「絵に誘われて」。5分前には4名のお客様が集まりました。

「アナウンスにもありましたように、私が一方的に解説するのではなく、みんなで感じたことを話しながら作品を見ていきますので、みなさんの感想を聞かせてください」



一方的に解説を聞くと思っていた参加者は、戸惑いながらもガイドがどのような展開になるのか期待を持ってくれたようです。当館の概要を簡単に説明し、いよいよ作品の前に誘います。

14:00 「所蔵品ガイド」スタート

1. 下村観山《木の間の秋》1907年



「タイトルが《木の間の秋》ですが、画面から秋を感じますか？」

参加者全員で秋を感じるモチーフを次々に挙げていきます。



2曲1双の屏風。一見、右隻と左隻の画面がつながっているように見えますが、画面をよく観察しているうちに、別々の場面であることに気がきました。ガイドスタッフは参加者の気づきを引き出し、発言をつなぎます。

「作者が描きたかったものは何だったのでしょうか？」

「光！」(意見が即座に出ました)

「うん、光を感じるね」

作品内の光源を確認し、最後に、雑木林の中を散策するように左から右へ歩きながら鑑賞しました。



「葉脈が金で描かれてる！」

近づいてみると、新たな発見があります。

2. 土田麦僊《湯女》1918年



「大きな作品なので、遠くから眺めたり、近づいたりしながらご覧ください。最初にどこに目がいきますか？」

「横たわる女の」

「人物だけでなく、画面を埋め尽くす松にも目がいきます」

「藤」

「キジ」

「キジは何羽いますか？」

「つがいです。つがいというのが、何か意味がありそうですね」



目にとまるモチーフを確認しながら、意見を交わします。画面全体を見ているうちに、参加者から「音が聞こえる」という感想が出ました。

「それは、どのような音でしょうか？他のお客様も音が聞こえてきますか？」

参加者全員で音を感じるものを挙げると、三味線の音や川の音など、見れば見るほど音が聞こえてきました。作品に関する解説も加えながら、描かれている二人の人物像の関係を想像して終わりました。

3. ワシリー・カンディンスキー《全体》1940年



最後に鑑賞した作品では、参加者から「風を感じる」「音楽が聞こえる」と、さまざまな意見が飛び交いました。

音楽という視点で画面を見てみると、ひとつひとつのモチーフが音楽と関連のある形に見えてきました。参加者が五線譜のような形も見えました。最後にみんなで画面から聞こえてくるリズムを想像しながら終わりました。



カンディンスキーが音符を点に翻訳した資料を見せている様子

ガイド終了後も、参加者から「もっとトークを聞きたい」と言っていただきました。ガイドを最後まで楽しんでいただけたようです。

14:45 終了

15:00 看板の片付け

15:15 日誌

当日のあらましをガイドスタッフ限定のブログに投稿し、印刷したものをファイルに綴じます。

2011/11/08 (火曜日)

- ・テーマ：絵に誘われて
- ・所要時間：45分
- ・天気：曇り
- ・参加人数：9人
- ・作品名：下村観山《木の間の秋》土田麦僊《湯女》カンディンスキー《全体》

日誌

参加者は、男性/女性それぞれお二人連れ、ちょうど館を訪ねてくださったガイドスタッフOB、この5人とガイド仲間が3作品お付き合い下さいました。《木の間の秋》《湯女》では、付近にいた来館者何人かがついでに聞いていてくださった、というようなゆるい感じのガイドでした。

テーマの「絵に誘われて」は、カンディンスキーの「絵画も音楽と同じように、ここから見始めてここで終る、という様に作家が意図することも可能だ…」という文章を読んだ事より、それぞれの画を作家が意図した（のではないかと思われる）順に観ていったらどうだろう…という試みでした。

少人数で打ち解け易かった事、とても良い感性で思っ

たまを言うてくださる参加者であったため、《木の間の秋》では、この木はなにかと考へ、光を感じながら観山の導くままに林の中に分け入れたように思えました。

《湯女》では、松の葉冠の間に覗ける、湯女の様子、雉子の番や水の流れを順を追って観て行きました。参加者のお話を聞くうち、用意したオチを言い忘れてしまったという反省はありますが、半信半疑ながら聞いた「この画を、湯女と限定しなかったらどんな光景だと思いませんか？」という質問に、即座に「宮本武蔵のアケミとオコウの姿」と答えられ、参加者のイメージが膨らんだことを感じました。こちらが不勉強の為、其処からまた話を膨らませる事ができなかったのが残念でした。

《全体》は判りにくい作品かと思いましたが、積極的にお話して下さる男性が自分の感じたままを最初から「風」「音楽」…と発言して下さり、それによって私自身のイメージを膨らみ、それがまた他の人にも伝わって…という具合に進みました。ガイド自身の作品理解が不足であったため、決定的な説明ができなかったのですが、それなりに楽しめ、もっと学ばなければという思いを強く感じながら、終了となりました。

16:15 終了

所蔵品ガイドの感想

作品がより身近に感じられました。(70代 女性)

他の人の見方、感じ方が参考になった。「単に眺める」ではなく、「積極的に見る」を教わりました。(60代 女性)

作品の前で立ち止まり、思いをめぐらし言葉に出すという行為がとても楽しく感じました。(60代 女性)

他の方の意見が聞けて絵に対する見方が広がりました。(20代 女性)

ガイドさんに色々といいかけるだけで、絵が全く違って見えるのと、新しい発見がいろいろあって、本当に得した気分です。(30代 男性)

毎日ガイドがあるなんて素晴らしい。(60代 女性)

一人で来たので感想を話せる場があったよかったです。(70代 女性)

所蔵品ガイド参加者アンケートより(2008年~2010年)

所蔵品ガイド回数ベストテン

1位	2位	3位	4位：アントニー・ゴムリー《反映/思索》2000年
			5位：荻原守衛《女》1910年
萬鉄五郎《裸体美人》1912年	原田直次郎《騎龍観音》1890年 護国寺蔵(寄託)	岸田劉生《道路と土手と塀(切通之写生)》1915年	6位：新海竹太郎《ゆあみ》1907年
			7位：古賀春江《海》1929年
			8位：北脇昇《クオ・ヴァティス》1949年
			9位：和田三造《南風》1907年
			10位：吉原治良《黒地に白》1965年

ハイライトツアー 近代日本美術の流れを概観できるツアー

毎月第一日曜日の11時からハイライトツアーを実施しています。ハイライトツアーは1時間ほどかけて、コレクションの見所を押さえながら4階~2階を巡るものです。無料観覧日に実施することもあり、参加者数は毎回30人程度。所蔵品ガイドと比べると、作品や作家に関する情報を効率良く伝達することに重きがおかれています。元は研究員が行っていたハイライトツアーですが、2006年4月からガイドスタッフが担当することになりました。リピーターも増え、所蔵品ガイド同様に定着しつつあるプログラムです。



ハイライトツアーは時代の流れに沿って、明治・大正期の美術から始まる



100年間の美術を1時間で巡って終了

ハイライトツアー参加者の感想

短い時間の中で沢山の解説があり有意義。(50代 男性)

知らない、ただ見過ごすところを色々教えてもらった。(60代 男性)

毎月、楽しみにしています。(男性)

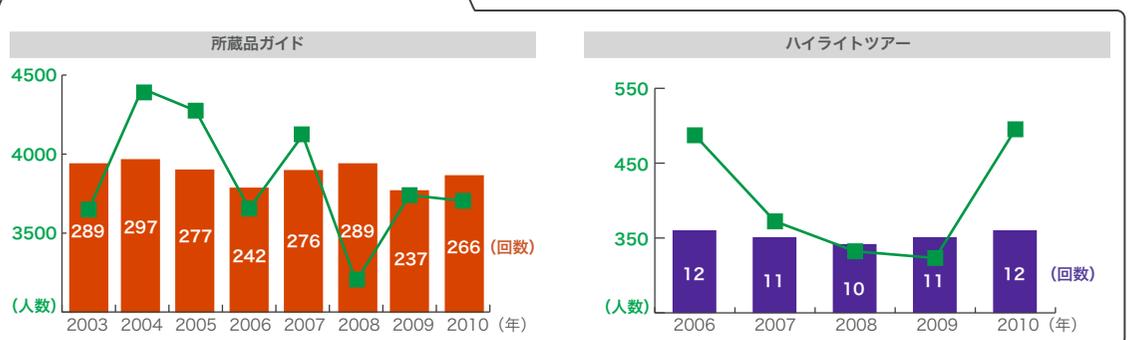
所蔵作品の全体像を把握するのによかった。(50代 男性)

時系列で解説を聞きながら鑑賞することで、社会背景も知ることができて大変面白かった。(40代 女性)

美術鑑賞をより身近なものにしていただき、楽しんでおります。(60代 女性)

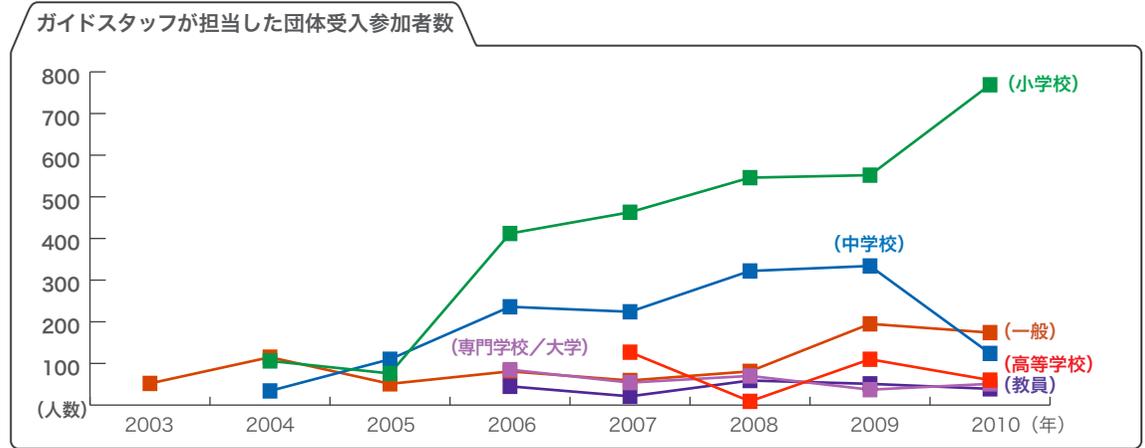
ハイライトツアー参加者アンケートより(2007年~2011年)

所蔵品ガイド&ハイライトツアー回数/参加者



スクールプログラム 授業で訪れる児童生徒にギャラリートーク

東京国立近代美術館は、学校と連携した鑑賞教育を、スクールプログラムとして行っています。2003年からは、授業で来館する小・中学生にガイドスタッフがギャラリートークを行うようになり、対応できる学校数を増やしてきました。標準的なスクールプログラムは、児童生徒を10名前後のグループに分け、それぞれにガイドスタッフが1名つき、3点の所蔵作品を約50分かけてじっくり見せていくというものです。所蔵品ガイドと同様に、対話によって子どもたちの思いや考えを引き出し、言語活動を取り入れながら、鑑賞力を養います。スクールプログラムの内容は、教員との打合せを元に、教育普及研究員とガイドスタッフ間で入念に決められます。授業の目的、滞在時間、児童生徒の学齢や人数などに応じて作品選定を行い、時にはワークシートやクイズも用いて、最適なプランを学校ごとに用意します。実施後は必ず反省会を行い、改善点などを共有し、次回に生かします。



ある日のスクールプログラム (2011年11月22日 港区立港陽小学校6年生)

教育普及室の準備

8月30日 申込み
6年生48名のスクールプログラムの申込みを受けました。

10月3日 トーカー募集
トーカー5名をメーリングリストで募集。

11月1日 事前打合せ
教育普及研究員が図画工作担当教諭と、美術館で打合せを行いました。アートカードを使った事前授業を行うことから、各グループ1点はアートカード掲載作品をトークすることに。また、ギャラリートーク後の自由鑑賞時間にワークシートを使用したいとのことでした。当日の児童の持ち物や、特にケアが必要な児童がいるかどうかについても確認します。

11月1日 プラン設計開始
打合せした内容をトーカー5名に伝え、トーク希望作品を選定してもらいます。教育普及室は作品選択や内容について確認。さらにグループ間で導線がバッティングしていないかも確かめます。

11月11日 詳細プラン決定
当日のタイムテーブルや、グループごとのトーク作品を記した詳細プランを決定し、担当教諭に伝えました。

9:40 スタッフ最終ミーティング
タイムテーブルなど、その日の留意点を確認します。

10:00 美術館に到着
まずはエントランスで挨拶。その後、グループに分かれて、美術館でのマナー(作品にさわらない、走らない、騒がない)を伝えます。



ガイドスタッフS(以下S):東京国立近代美術館へようこそ。みなさんが来てくれるのを楽しみに待っていました。今日みなさんをお願いしたいのは、お気に入りの作品を見つけてほしいということです。



S: みなさんに作品を見るということについてお話したいと思います。まずはじっくり見てください。遠くから、近くから作品をじっくり見てみて、作品に表れていることを出来るだけ想像をして、話をしてください。そして、友達のお話も聞いてくださいね。

10:10 作品鑑賞
1. 小出梢重《ラッパを持てる少年》1923年
最初の作品ではモデルの男の子について考えました。



S: まずは近くで見てみて。この子は何歳くらいかな?
「5歳!」(ほとんどの子どもがそう答える)
「手が膨れてるから幼いと思う」
S: 正解は5歳の男の子でした。みんなすごいね! では、この子の気持ちはどうだろう?

「まわりの色が暗いから、さみしそうに見える」
「ラッパを吹きたそう」
「悲しそう」
S: どうしてそう思ったの?
「目が涙目だから」
「笑ってない」
S: これを描いた画家さんとこの子は、どんな関係?

「自分の子どもの頃を思い出して描いている」
S: 実はお父さんが息子を描いたんです。5歳の子どもが10日間もモデルをしたそうです。

2. 高松次郎《No.273(影)》1969年
白い画面には大きな影が! 作者はどうして影を描いたのか、話し合ううちに考えが深まっていきます。



S: 最初は近くから見て、次に少し離れて見てみましょう。

「影がふたつある」
「床にも映っている」
S: これは写真? それとも絵だと思う人?
(手を挙げる。絵: 7人、写真: 1人)

S: 写真と思った人は、どうしてそう思ったの?
「絵だったらもっと色を使う」

S: これは写真に撮ったものを絵に描いた、限りなく写真に近い作品なの。何の影かな?

「手がぶっくりしてるから赤ちゃん」
「ポーズを見ると、この赤ちゃんとても楽しそう」

S: こんなに大きな赤ちゃんの影ができる? そうしたらどのあたりにいると思う?

(作品の前に座っていた子どもたちは立ち上がり、作品から離れて、位置を決めていく)

S: どうして作家さんはこんな影を描いたと思う?

「背景もないし、足も描いてない……」
「見ている人に考えてほしいから、足を描かなかったのかな」
「赤ちゃんは生まれるまで存在していない。“いる” “いない” ってことを考えるために赤ちゃんを描くのはいいと思った」

S: すごいね。みんなよくそこまで考えてくれました。作家さんも存在ってということについて考えていた人だから、こういう風に描いたのかもね。

3. アントニー・ゴームリー 《反映/思索》2000年

最後の作品はガラスを挟んで室内と屋外に展示された人型の彫刻。二人は向き合って何を思っているのか、ふたつを見比べながら意見を出し合いました。



「男の人」「鏡みたい」「色が違う」と口にしながら、作品へと近づいていく

S：この人はどんな気持ちだろう？

「外にいる人は自由で、中にいる人は自由じゃない」「表情がない。目のくぼみはあるけど、のっぺらぼう」

S：向こう側に自分と同じ人がいたら、どんな気持ち？町の中で自分と同じ人に会ったらどう？

「何でって思う」「どっちが本物なのか、驚くと思う」

S：向かい合って何をしてる？

「しゃべってる。『お前何だ？』『何でここにいるんだ？』『お前こそなんだ？』って」

この後ワークシートを配布。タイトルと二人の台詞を考えてもらい、発表しました。

S：今日は作品をじっくり見て、いろいろと想像してくれたね。どうもありがとう。

11:00 自由鑑賞時間

先生が用意したワークシートに、気に入った作品や感じたことを記入しながら、自由に鑑賞しました。



11:45 再集合、美術館を出発

S：もっと見たかったかな？楽しい時間でしたね。一生懸命見てくれて嬉しかったです。初めにお願いしていた、お気に入りの作品を見つけた人はいますか？またお気に入りの作品に会いに、そして別のお気に入りの見つけに、また来てくださいね。



11:50 反省会

ガイドスタッフルームで、各グループごとにトークの内容や子どもの様子を伝え、反省会を行いました。

12:30 終了

後日、小学校から感想文が届きました。

どの作品も、作者の思いがこめられていた。

いろんな絵を見て、すごく興味深かったです。いつもは絵や彫刻を見るだけで、何も考えなかったけど、今度からは作者がどんな気持ちでかいて、作っているのか、絵の表情をもっと観察したいです。

スクールプログラムに参加した子どもたちの感想

ほかの人の見方、考え方がわかって世界が広がったような気がしたところが楽しかった。
(小6 男)

1つの作品のことについてみんなで話すのが楽しかった。また来たい。
(小4 女)

それぞれの絵を深く違う視点から知ることができました。それぞれの絵にとっても深い意味があり、絵がもっと好きになった気がします。
(中1 男)

みんなの意見が聞けて、空想をより広げることができた。
(小5 男)

作品を深く見て、考えることで、新しい発見ができました。
(中1 女)

いろいろなえなどで自分で思ったことや、ほかの人がいったことでぜんぜんちがいがびっくりしました。
(小4 女)

ギャラリートークでいろんな意見をきくことで、絵の見方がかわったりして、とても楽しかったです。
(中1 女)

みんなの意見で見方が変わったり、「そういう見方もあるんだなあ」と思えたところが楽しかった。
(小5 女)



手紙や「ふりかえりシート」より(2008年～2010年)

スクールプログラムの引率教員や保護者からの感想

今回のプログラムに参加して、子どもたちは「見る」楽しさ、感じたこと考えたことを言葉で話す喜びを感じているようでした。
(小学校教諭)

皆、自由に感じたことを発言していました。他の子と違う意見でも恥ずかしがらず、自分の意見を言ったり、想像をどんどんふくらませて、絵のサイズよりも大きな絵の中の世界を見ることができていました。
(小学校引率協力の保護者)



みなそれぞれ「何かを見て、感ずる心」を養っていただいていた一日を過ごせたように思います。ギャラリートークでの子どもたちの積極的な姿勢が見られたことに教員一同感激しております。
(中学校教諭)

